

**JAAF
GUIDE
BOOK**
2021-2022
Challenge the Future

**JAAF
GUIDE
BOOK**
2021-2022
Challenge the Future

新たな可能性への挑戦

東京2020オリンピックが終了し、多くの挑戦や経験をレガシーとして継承しつつ、新たなイノベーションを生み出して、価値創造につなげていきます。さらに、「陸上」が社会に良い影響を与え、多くの人に感動体験を提供し、競技力向上と共に社会で貢献できる人材を輩出できるよう、「陸上」の価値向上を目指します。

CONTENTS

World Standard Athletes	04
Athletics for Wellness	08
Managing Competitions	12
Developing Human Resources	14
Athletics in Numbers	16
Web	18
History	20
Organisation	22
JAAF REFORM	24
JAAF Message	26



World standard Athletes

〈国際競技力向上を目指して〉



Athletics for Wellness

〈ウェルネス陸上の実現を目指して〉



Managing Competitions

〈競技会運営〉



Developing Human Resources

〈人材育成〉

World Standard

Athletes

国際競技力向上を目指して

東京2020オリンピックまでの過程や大会結果を踏まえ、改善点と継続すべき点を振り返り、新たに進む糧として、人も組織も大きく成長できる機会と捉えながら、新たなステージで挑戦をしていきます。

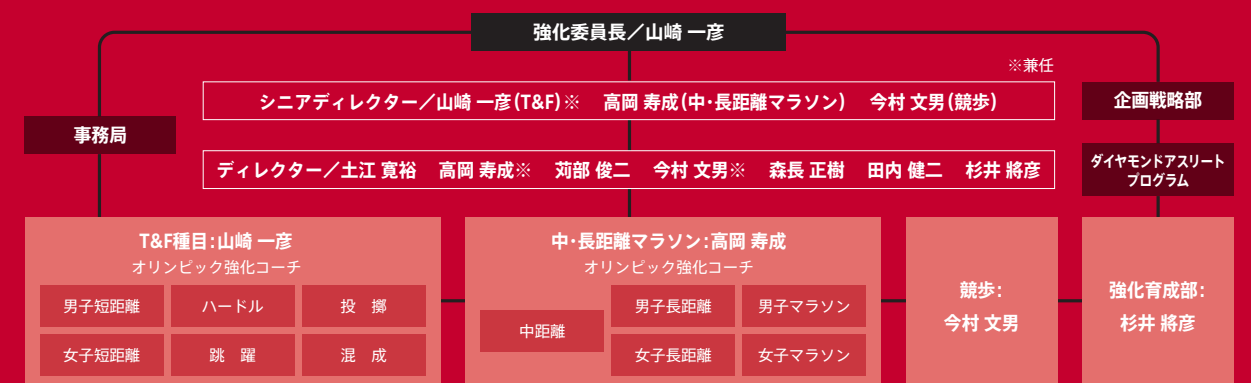
1 国際競技会での活躍を目指して

オリンピック、世界陸上等の国際競技会に選手を派遣、世界標準の競技意識のもと、世界トップレベルで競い合える競技力の向上を目指します。

▼ 国際競技会派遣予定 ※2021年11月現在

	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
世界 シニア	第18回世界選手権	第19回世界選手権	第33回パリ五輪	第20回世界選手権		第21回世界選手権	第34回ロサンゼルス五輪
	第18回世界室内	第19回世界室内	第20回世界室内	第7回世界リレー	第21回世界室内	第8回世界リレー	第22回世界室内
		第6回世界リレー	第45回世界クロカン		第46回世界クロカン		
	第25回世界ハーフ	第1回ロードランニング	第45回世界クロカン	第2回ロードランニング	第3回ロードランニング		
	第29回世界競歩チーム		第30回世界競歩チーム		第31回世界競歩チーム		第32回世界競歩チーム
第19回杭州アジア大会				第20回愛知・名古屋アジア大会			
アジア シニア	第18回アジアマラソン	第24回アジア選手権		第25回アジア選手権		第26回アジア選手権	
	第16回アジアクロカン	第19回アジアマラソン		第20回アジアマラソン		第21回アジアマラソン	
	第10回アジア室内		第17回アジアクロカン		第18回アジアクロカン		第19回アジアクロカン
	第1回アジアリレー		第11回アジア室内		第12回アジア室内		第13回アジア室内
	第1回アジア投擲選手権						
ジュニア ユース	第19回U20世界選手権		第20回U20世界選手権		第21回U20世界選手権		第22回U20世界選手権
	第19回U20アジア選手権		第20回U20アジア選手権		第4回ユース五輪		
	第4回U18アジア選手権	第5回U18アジア選手権		第6回U18アジア選手権	第21回U20アジア選手権		第22回U20アジア選手権

▼ 強化プロジェクト図 ※2021年11月24日現在



2 U20世代から世界へ ~ダイヤモンドアスリートプログラム~

オリンピックや国際競技会での活躍が期待される選手に対して、競技力向上と共に、豊かな人間性と国際的なリーダーシップを発揮できるアスリートの育成を目指します。

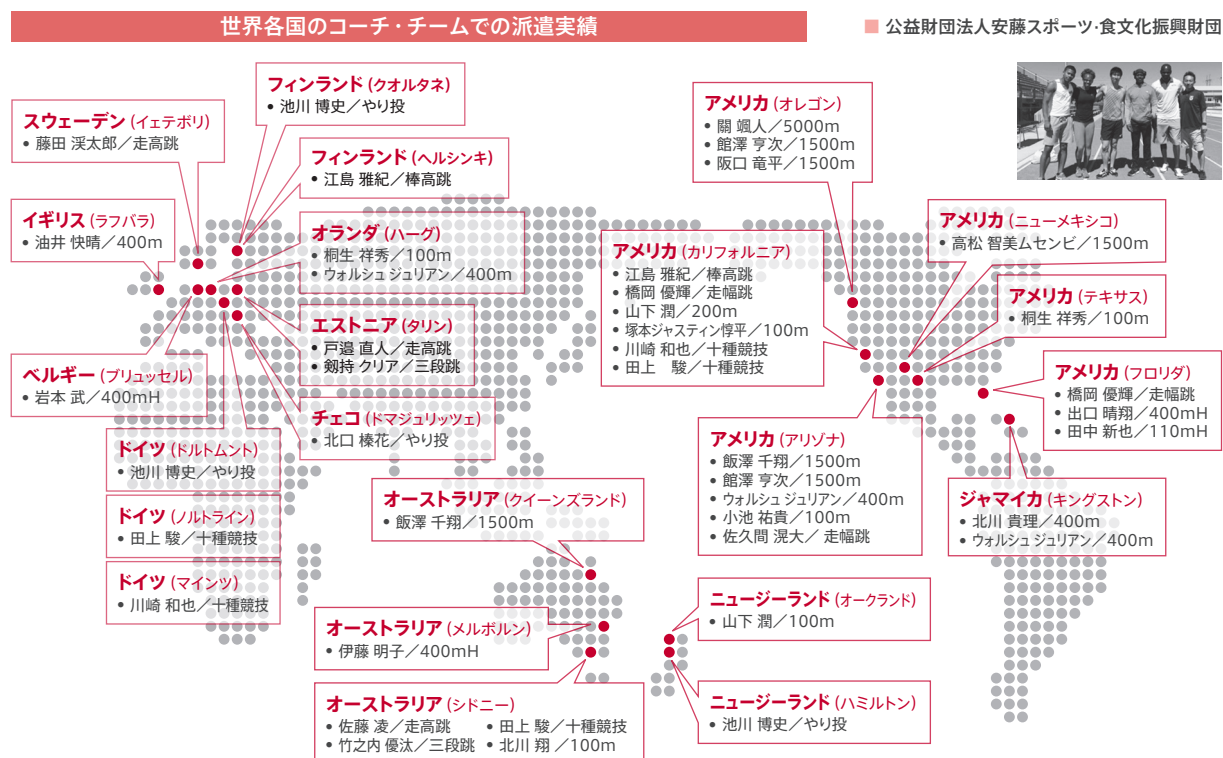


- サポート企業
- 一般財団法人 東京マラソン財団 スポーツレガシー事業
 - アシックスジャパン株式会社
 - デンカ株式会社
 - エームサービス株式会社
 - 株式会社GABA

◀ リーダーシッププログラムとして、太田雄貴さん・為末大さんのトークセッションを通じ、アスリートとしての取り組み方や組織改革・事業展開など、競技の枠を越えたプログラムを実施。

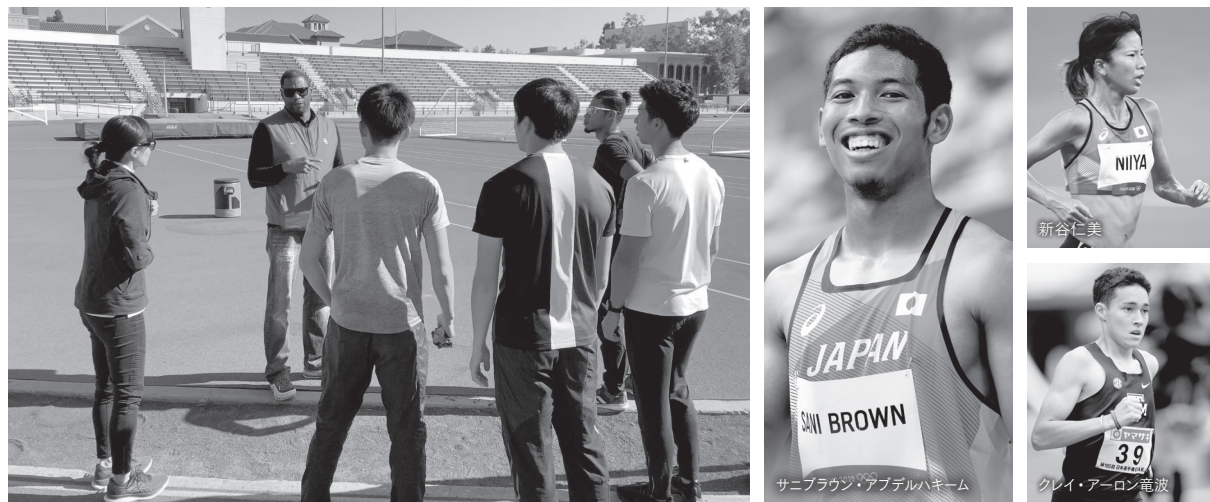
3 世界標準のアスリート育成 ~安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト~

若手アスリートの海外挑戦を支援するプロジェクトであり、アスリート自身で海外挑戦内容を決め、費用算出を踏まえて現地と調整・計画し、選考会議でサポートを決定。セルフマネジメントや海外滞在での経験や現状を知ること、今後の海外転戦や競技強化留学も抵抗なく選択できるようになることを狙っています。



4 <JSC支援>アスリート強化 次世代ターゲットスポーツ/有望アスリート/トップアスリート/ユースアスリート

日本スポーツ振興センター(JSC)の委託/助成を受け、パリ2024オリンピックでの活躍を目指した強化活動を実施しています。2021年度は男子4×400mリレーが「次世代ターゲットスポーツの育成支援事業」、サニブラウン・アブデル・ハキームが「有望アスリート海外強化支援事業」から委託を受けています。また、「トップアスリート」は新谷仁美ほか7名、「ユースアスリート」はクレイ・アーロン・竜波ほか14名が助成を受けています。



5 トップコーチ/マネジメント養成

JOC(日本オリンピック委員会)のナショナルコーチアカデミー事業やJSCのハイパフォーマンス統括人材の育成支援事業、WA(ワールドアスレティックス)のCECS(Coaches Education and Certification system)制度の活用など、コーチスキルやマネジメントスキルを高めるプログラムを推進しています。



6 陸上に特化した医科学サポート

トップアスリートが高いステージで活躍できるよう、充実した医科学サポートと体制強化を行っています。国際競技会や各種遠征での医師・トレーナー・栄養士等の帯同やメディカルチェック、アンチ・ドーピング教育啓発活動、測定データを用いた科学分析など、選手がより活躍出来るようサポートしています。



Athletics for Wellness

ウェルネス陸上の実現を目指して

全ての人にとって「陸上」が、より身近で親しみやすく、ライフスタイルに溶け込むようなウェルネス陸上を目指していきます。また、前向きで充実した生活になるような多くの感動体験を提供していきます。

1 身近で気軽な 「陸上」スタイルの確立

身体を動かす楽しさや、自分のペースで“できること”を増やしたり記録を伸ばせる魅力に共感してもらい、より馴染みやすく参加しやすい「陸上」機会の提供を目指します。また、中学校を中心とした運動部活動の地域移行が検討される中、子どもたちが楽しく長く「陸上」に親しみ、社会性を学ぶことができるよう、部活動と地域の協働や地域移行へのサポートを通じ、多様性に応じたスポーツ環境の発展にも寄与していきます。



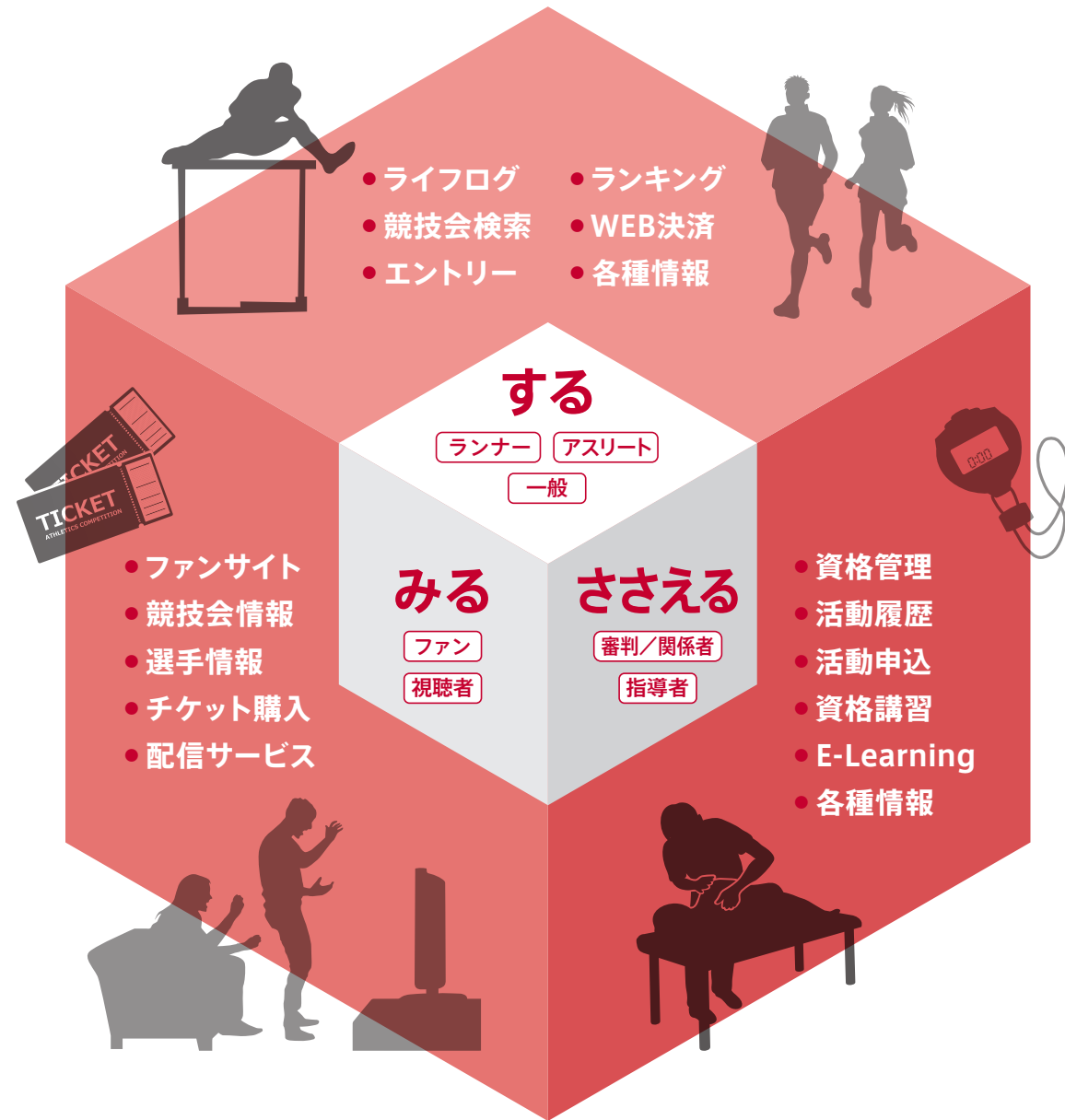
2 心躍るエキサイティングな 感動体験の提供

「陸上」そのものの魅力や過程・ストーリーなどを展開し、「陸上」の裏側を含めたドキュメンタリーや、競技会会場での緊張感・高揚感など『LIVE ATHLETIC』を感じてもらえるような感動体験を提供していきます。また、アスリートがより身近で、応援しやすい交流の場など、コミュニケーションによる共感や帰属意識が高まる方法も検討していきます。



3 生涯に渡る充実したサービス提供

満足度の高いサービス提供を目指し、様々な「陸上」の楽しみ方の提供を目指していきます。具体的には、登録システム上で、「陸上」の生涯記録や活動履歴などのサービス提供が出来るようにし、また日々の生活の中でも活かせるプラットフォームの整備を通じ、その人に合った情報提供ができるようにしていきます。



4 RunLink事業

RunLink事業はマラソン大会・イベントと共に、個人のライフスタイルに合わせたランニングを楽しむ環境・機会を提供することを目的としたプロジェクトです。全国各地で開催されている約2,000~3,000にものぼる市民マラソン大会や行政、企業といった、あらゆるステークスホルダーと連携することでランニング人口の裾野の拡大を目指しています。「安全・安心」の大会をベースに大会以上の価値を創っていき、ランニングのある生活が増えるよう、市民マラソン大会の統括・支援、個々のライフスタイルに合わせた環境・機会を提供することを実施していきます。



Running Week 2019

◀ 市民マラソン大会の統括・支援、個々のライフスタイルに合わせたランニングを楽しむ環境・機会を提供し、ランニングへの興味関心を高めていくと共に、よりパワフルでイノベーティブな新しいランニングイベントとなった。



IAAF(現WA) RUN 24:1
「Outrun the Sun」

◀ ワールドアスレティックスのグローバルキャンペーンとして、世界 24 都市におけるファンランイベントを実施。ニュージーランド(オークランド)から、カナダ(バンクーバー)まで 24 都市を RUN で繋ぎ、東京は3番目で受け継ぎ、中国(北京)へと繋いだ。大地に沈む太陽と共に走り、世界中の人々と走る喜びを分かち合った。

5 JAAF Road Running Commission

日本のマラソン・ロードレースの全体運営を機能的・戦略的に進め、ロードレース全体を活性化させていくための組織を立ち上げ、マラソン・ロードレースの価値向上やランニング人口拡大、情報発信を積極的に行います。

▼マラソン/ロードレース活性化の取組み



Managing Competitions

競技会運営

競技会をより魅力的に実施できるよう企画検討をいくと共に、競技会カレンダーの最適化や運営効率化により、選手はもちろん運営・審判等の関係者にも、感動体験の共有ができる競技会運営を目指していきます。

1 主催競技会一覧

日本選手権	ジュニア全国大会	マラソン	その他
日本選手権	全国小学生陸上	東京マラソン	全日本競歩能美
日本選手権・10000m	全日本中学通信陸上	大阪国際女子マラソン	日本室内大阪
日本選手権・混成競技	全国中学陸上	名古屋ウィメンズマラソン	都道府県対抗男子駅伝
日本選手権・室内競技	全国高校陸上	大阪マラソン・びわ湖毎日マラソン	都道府県対抗女子駅伝
日本選手権・リレー競技	全国定通制高校陸上	長野マラソン	国民体育大会
日本選手権・クロスカントリー	全国高専陸上	レガシーハーフマラソン	ゴールデングランプリ陸上
日本選手権・35km競歩	全国高校リモート陸上		ディスタンスチャレンジ
日本選手権・20km競歩	U16陸上競技大会		
U20日本選手権	U18陸上競技大会		
U20日本選手権・混成競技	全国中学駅伝		
U20日本選手権・クロスカントリー	全国高校駅伝		
	全国中学生クロスカントリー		

2 日本陸上競技選手権大会

特別協賛：山崎製パン株式会社

3 ゴールデングランプリ陸上

特別協賛：セイコーホールディングス株式会社

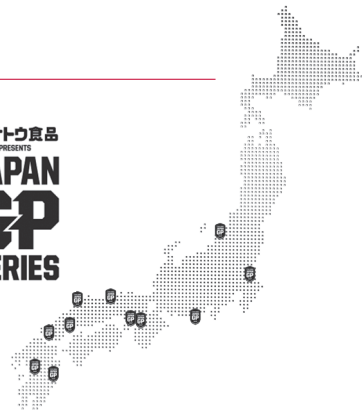
4 日本グランプリシリーズ

「日本グランプリシリーズ」は指定大会を対象に、年間を通してポイントを争うトラック&フィールド大会の総称です。国内ハイレベルの競技会として、世界で活躍できるアスリートの強化・育成を図り、国内各地で開催することで、ファンに広くパフォーマンスを披露し、ファン拡大や応援文化の定着を目指します。



2021年度ネーミングライツパートナー：サトウ食品株式会社

サトウ食品 PRESENTS JAPAN GP SERIES



5 ジャパンマラソンチャンピオンシップシリーズ (JMCシリーズ)

日本のマラソン全体の活性化と、一定期間内の獲得ポイントで決定した総合成績から、日本選手権タイトルや日本代表選考を行う新たな仕組みとして創設。第1期グレード1の競技会については、「オレゴン2022世界陸上競技選手権大会」および「杭州2022アジア競技大会」の日本代表選手選考競技会として開催します。



期	シリーズ	期間	チャンピオン
第0期 (2020年12月 ~ 2021年10月)	シリーズ I	期間：2020年12月1日 ~ 2022年3月31日	シリーズ I チャンピオン = 第105回日本選手権者
第1期 (2021年11月 ~ 2022年 3月)	シリーズ II	期間：2021年11月1日 ~ 2023年3月31日	シリーズ II チャンピオン = 第106回日本選手権者
第2期 (2022年 4月 ~ 2023年 3月)			
第2期 (2022年 4月 ~ 2023年 3月)	シリーズ III	期間：2022年4月1日 ~ 2024年3月31日	シリーズ III チャンピオン = 第107回日本選手権者は 2023MGC優勝者
第3期 (2023年 4月 ~ 2024年 3月)			
第3期 (2023年 4月 ~ 2024年 3月)	シリーズ IV	期間：2023年4月1日 ~ 2025年3月31日	シリーズ IV チャンピオン = 第108回日本選手権者
第4期 (2024年 4月 ~ 2025年 3月)			

また、パリ2024オリンピックのマラソン日本代表選手選考の方法について、東京2020オリンピックの代表選考と同様に、「マラソン グランドチャンピオンシップ (MGC)」を導入します。

詳しくは [MGC 陸上](#) で検索



6 アスレティクス・アワード

アスレティクス・アワードは、当該年に活躍した競技者や競技を通じて社会に貢献された方々を称えると共に、本連盟をご支援いただいている皆さまに感謝の意をお伝えすることを目的として開催しています。



7 審判養成

- 審判員養成講習会
- JTO/JRWJ講習会
- 自転車計測員講習会



8 競技規則

- 陸上競技ルールブック
- 陸上競技審判ハンドブック
- シューズ規則
- 衣類/広告物の情報



9 競技場・長距離競走(歩)路公認/用器具検定

- 陸上競技場の公認検定
- 長距離競走(歩)路の公認検定
- 用器具の検定



10 イベントプレゼンテーション (EP)

映像や音楽、照明などを用いて、より魅力的な競技会にする企画・進行を行っています。



11 新型コロナウイルスの対応について

「自分を大切に、周りを思いやり、共に前へ進もう」をスローガンに、「最大限の感染防止」を前提に、社会情勢を敏感に見極めながら、感染対策を講じています。今後も新たな医学的知見や感染状況等により、ガイダンス内容を見直し、継続可能な活動を目指していきます。

Developing Human Resources

人材育成

「陸上」を楽しく継続的に行う環境づくりや、アスリートの競技力向上と共に、社会の中で生きるライフスキルの向上も重視しています。また、指導者の在り方や学習機会など、生涯にわたって主体的に「陸上」に関わり続ける意欲を持った人材育成をしています。

1 〈アスリート育成〉 楽しく意欲的な活動を目指して

幼児期から生涯にわたる発育発達に応じた活動の方向を示した『競技者育成指針』を基に、一人でも多くの人に「陸上」を楽しむ機会を提供し、「陸上」を「する・みる・ささえる」などの主体的かつ多様な関わりがもてる環境づくりを進めています。

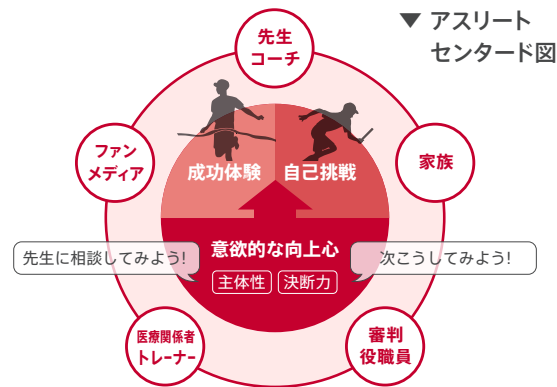


競技者育成指針 競技者育成プログラム タレントトランスファーガイド

幼児期から小学校期は、過度な競争や早期専門化を避け、身体を動かす楽しさや高揚感を味わいながら、身体リテラシーを育めるよう、講習会実施や競技会の在り方を検討しています。

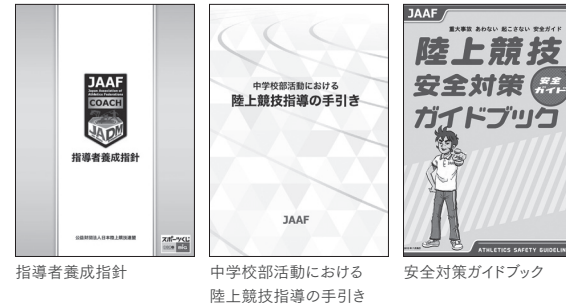


アスリートセントアードの理念に基づき、アスリートと関わりを持つ全ての人々(アントラージュ)とともに、年代に合った陸上イベントや多種目を体験できるプログラム、「陸上」に必要な知識や要素を踏まえた講習会などを実施しています。



2 〈指導者養成〉未来の可能性を引き出せる指導者を目指して

一人でも多くの人に「陸上」を楽しみ、少しでも長く関わり続けてもらうためには、指導者の役割が極めて重要です。『指導者養成指針』に沿って、スポーツのインテグリティ(健全性)を守り、「陸上」の楽しさや価値を伝え、ライフステージや競技レベルに応じたコーチングを全国に普及させるために、全ての指導者のコーチ資格取得を目指します。



指導者養成指針 中学校部活動における陸上競技指導の手引き 安全対策ガイドブック



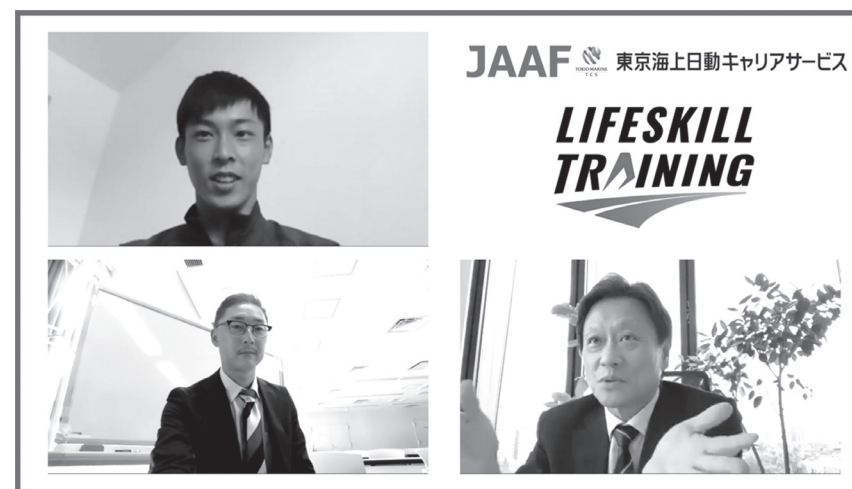
コーチングクリニック

資格名	JAAF 公認コーチ (JSPO公認陸上競技コーチ3・4)	JAAF 公認ジュニアコーチ (JSPO公認陸上競技コーチ1・2)	JAAF 公認スタートコーチ (JSPO公認陸上競技スタートコーチ)
養成目的	地域および都道府県の競技者の指導、育成、強化にあたる指導者を養成する。	発育発達段階を考慮した競技者育成のための基本指導を行える指導者を養成する。	必要最低限度の知識・技能を修得した上で、陸上競技の上位資格者と協力して、安全で効果的な活動を提供する者を養成する。
役割	各地域および都道府県の競技者育成・強化にあたる。	地域スポーツクラブ(スポーツ少年団を含む)等において、陸上競技の基礎的な実技指導にあたる。小・中・高校生の部活動の指導にあたる。	地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、学校運動部活動等の指導にあたる。

JAAF公認コーチ資格者から、地域の指導者を養成し、併せて指導体制作りを牽引する“エデュケーター”を選抜、そのためのプログラムを実施する予定です。

3 社会で輝く人材育成 ~ライフスキルトレーニングプログラム~

本プログラムは、競技力向上はもちろん、競技以外の人生においても可能性を最大限に生かす人材を輩出し、「陸上」から生まれるリーダーたちが、これからのスポーツ界や社会をより輝くものにするを最大の狙いとしています。



▲「自分の最高を引き出す技術」を身につけられるよう、常に最善の選択を行えるように、自分をコントロールするためのトレーニングを実施しています。

Athletics in

Numbers

登録者数やジョギング・ランニング人口、公認指導者数をはじめ「陸上」に関わる人々が増え、誰でも参加しやすい環境づくりやアスリートの活躍が皆さんの感動体験に繋がるよう、様々な数字を基に、今後の陸上界の発展に向けて挑戦を続けていきます。

日本陸連登録者数

380,680 人

※2020年度登録者

日本陸連主催競技会数

34 競技会

※2020年度主催競技会

日本陸連公認
競技場／コース数

492 競技場 / 241 コース

※2021年2月17日現在

日本陸連事業規模

17億3,722万円

※2021年度予算 経常費用計

オリンピックメダル総獲得数

金 7・銀 10・銅 10

※東京2020オリンピック終了現在

日本スポーツ協会
公認指導者（陸上競技）

5,214 人

※2021年10月1日現在

ジョギング・ランニング人口

10,550,000 人

※2020年笹川スポーツ財団推計

陸上競技
年間テレビ露出時間

3,399 時間

※2019年ビデオサーチ

2021年
日本記録更新回数

19 回

※2021年10月現在

リオ2016オリンピックー東京2020オリンピック
プレイングテーブル

24位 ▶ 18位

※プレイングテーブル：順位をポイント化した国別ランキング

※上記情報はいずれも発行日時点、またはそれ以前の情報となりますので、その後変更になっている可能性があります。

Web

ウェブインフォメーション

本連盟WEBサイトに掲載している各種情報を、カテゴリー別にQRコードを掲載しました。スマートフォンや携帯電話、タブレット等からQRコードを読み込んでご確認ください。



国際競技力 国際競技力の向上

チーム JAPAN  ダイヤモンドアスリート 

国際競技力 世界記録/日本記録

世界記録/日本記録  東京2020特設サイト 

ウェルネス陸上 JAAF RunLink

JAAF RunLink  ランニングに関わるすべての方へ
日本陸上競技連盟の新たなプロジェクト

競技会運営 競技会情報全般

競技会情報全般  日本グランプリシリーズ 

競技会運営 マラソンシリーズ

ジャパンマラソンチャンピオンシップシリーズ (JMCシリーズ)  マラソングランドチャンピオンシップ (MGC) 

競技会運営 ルールブック/ハンドブック

ルールブック  ハンドブック 

競技会運営 再開ガイダンス/競技会関連規程

On your marks ページ  競技運営委員会 ページ 

登録 日本陸連登録

日本陸連登録について  日本陸連登録料設定について 

人材育成 競技者育成資料

競技者育成指針  競技者育成プログラム  タレントトランファーマイト 

人材育成 JAAF指導者資格/指導者講習会

公認コーチ/ジュニアコーチ  コーチングクリニック 

人材育成 指導者養成資料

指導者養成指針  中学校部活動における陸上競技指導の手引き 

人材育成 安全対策資料/動画

指導者用「事故を防ぐ3つのポイント」資料  陸上競技安全ガイド動画 

人材育成 安全対策ガイドブック/ガイドライン

安全対策ガイドブック資料  安全対策ガイドライン資料 

人材育成 ライフスキルトレーニング/バックヤードツアー

ライフスキルトレーニングプログラム  7C-Teensプロジェクト 

情報 時報/出版物一覧

陸連時報  出版物一覧 

情報 フォト/動画/陸上競技ガイド


フォト/動画  陸上競技ガイド 

医事 アンチ・ドーピング/メディカル関連

- 世界アンチ・ドーピング規程 2021
- 禁止表国際基準2021
- 世界陸連 Health & Science Department
- 18歳未満競技者親権者同意書
- TUE申請について

・メディカル質問箱

・疲労骨折予防10か条

・不適切な鉄剤注射の防止に関するガイドライン 

医事 医事関連資料

クリーンアスリートをめざして  Anti -3D (ドーピング/違法薬物/未成年飲酒防止) 


科学 科学データ関連

科学委員会研究活動報告書 

組織 JAAF中長期計画関連

JAAF VISION 2017  JAAF REFORM 中長期計画 


組織 ガバナンスコード

ガバナンスコード遵守状況の自己説明/公表 

組織 オフィシャルパートナー・スポンサー/ショップ

オフィシャルパートナー・スポンサー  オフィシャルショップ 

組織 本連盟業務・財務関連資料

定款/定款細則/財務情報 

※上記情報はいずれも発行日時点、またはそれ以前の情報となりますので、その後変更になっている可能性があります。

History

未来への継承

1928年男子三段跳の織田幹雄が日本オリンピック史上初の金メダル獲得から始まったオリンピック・世界選手権のメダリストとこれまで歩んできた日本陸連小史を紹介します。

戦前の三段跳・3連覇

1928年アムステルダム大会陸上三段跳で織田幹雄が日本で初の金メダルを獲得。その後1932年ロサンゼルス大会で南部忠平、1936年ベルリン大会で田島直人が三段跳で金メダルを獲得し、日本人3連覇の偉業を達成した。



マラソンで相次いでメダル獲得

マラソンでは、戦前の1936年ベルリン大会で孫基禎が金、南昇竜が銀メダルを獲得。戦後では1964年東京大会で円谷幸吉が銅、1968年メキシコ大会で君原健二が銀メダルを獲得している。そして君原から24年後の1992年バルセロナ大会で男子・森下広一、女子・有森裕子が銀。2000年シドニー大会では高橋尚子が日本陸上女子史上初の金メダルに輝いた。続く2004アテネ大会では野口みずきが金メダルを獲得し、日本人2連覇を果たした。



ハンマー投、男子4×100mリレー & 競歩

近年では2004年アテネ大会で室伏広治が男子ハンマー投で金メダルを獲得し、投てき競技初のメダリストとなった。男子4×100mリレーでは日本チームが2008年北京大会、2016年里オデジャネイロ大会で銀メダル。男子50km競歩では2016年里オデジャネイロ大会で荒井広宙が銅メダル、男子20km競歩では2020年東京大会で池田向希が銀メダル、山西利和が銅メダルを獲得している。



▼ 陸上・オリンピックメダリスト

年	開催地	メダル	選手名	種目
1928	アムステルダム	金	織田 幹雄	男子三段跳
		銀	人見 綱枝	女子800m
		銅	南部 忠平	男子三段跳
1932	ロサンゼルス	金	南部 忠平	男子三段跳
		銀	西田 修平	男子棒高跳
		銅	南部 忠平	男子走幅跳
1936	ベルリン	金	大島 謙吉	男子三段跳
		銀	田島 直人	男子三段跳
		銅	西田 修平	男子棒高跳
1964	東京	銅	円谷 幸吉	男子マラソン
		銀	君原 健二	男子マラソン
		銅	森下 広一	男子マラソン
1968	メキシコシティ	銀	君原 健二	男子マラソン
		銅	森下 広一	男子マラソン
		銀	有森 裕子	女子マラソン
1992	バルセロナ	銀	森下 広一	男子マラソン
		銅	有森 裕子	女子マラソン
		銀	有森 裕子	女子マラソン
1996	アトランタ	銅	有森 裕子	女子マラソン
		金	高橋 尚子	女子マラソン
		銅	室伏 広治	男子ハンマー投
2000	シドニー	金	高橋 尚子	女子マラソン
		銀	野口 みずき	女子マラソン
		銅	野口 みずき	女子マラソン
2004	アテネ	金	室伏 広治	男子ハンマー投
		銀	野口 みずき	女子マラソン
		銅	野口 みずき	女子マラソン
2008	北京	銀	塚原・末續・高平・朝原	男子4×100mリレー
		銅	室伏 広治	男子ハンマー投
		銅	山縣・飯塚・桐生・ケンブリッジ	男子4×100mリレー
2012	ロンドン	銅	室伏 広治	男子ハンマー投
		銀	荒井 広宙	男子50km競歩
		銅	荒井 広宙	男子50km競歩
2016	リオデジャネイロ	銀	山縣・飯塚・桐生・ケンブリッジ	男子4×100mリレー
		銅	荒井 広宙	男子50km競歩
		銀	池田 向希	男子20km競歩
2021	東京	銀	池田 向希	男子20km競歩
		銅	山西 利和	男子20km競歩
		銅	山西 利和	男子20km競歩

▼ 陸上・世界選手権メダリスト

年	開催地	メダル	選手名	種目
1991	東京	金	谷口 浩美	男子マラソン
		銀	山下 佐知子	女子マラソン
1993	シュツットガルト	金	浅利 純子	女子マラソン
		銅	安部 友恵	女子マラソン
1997	アテネ	金	鈴木 博美	女子マラソン
		銅	千葉 真子	女子10000m
1999	セルビア	銀	市橋 有里	女子マラソン
		銅	佐藤 信之	男子マラソン
2001	エドモントン	銀	土佐 礼子	女子マラソン
		銀	室伏 広治	男子ハンマー投
2003	パリ	銅	為末 大	男子400mH
		銀	野口 みずき	女子マラソン
		銅	末續 慎吾	男子200m
2005	ヘルシンキ	銅	室伏 広治	男子ハンマー投
		銅	千葉 真子	女子マラソン
2007	大阪	銅	尾方 剛	男子マラソン
		銅	為末 大	男子400mH
2009	ベルリン	銀	土佐 礼子	女子マラソン
		銅	尾崎 好美	女子マラソン
2011	テグ	銅	村上 幸史	男子やり投
		金	室伏 広治	男子ハンマー投
2013	モスクワ	銅	福士 加代子	女子マラソン
		銅	谷井 孝行	男子50km競歩
2015	北京	銅	谷井 孝行	男子50km競歩
		銅	小林 快	男子50km競歩
2017	ロンドン	銀	荒井 広宙	男子50km競歩
		銅	小林 快	男子50km競歩
2019	ドーハ	銅	多田・飯塚・桐生・藤光	男子4×100mリレー
		金	山西 利和	男子20km競歩
		金	鈴木 雄介	男子50km競歩
2021	東京	銅	多田・白石・桐生・サニブラウン	男子4×100mリレー
		銅	多田・白石・桐生・サニブラウン	男子4×100mリレー

▼ 日本陸連小史

1913	大日本体育協会が第1回陸上競技会(今の日本陸上競技選手権大会)を開催	1971	3月に行われた昭和45年度代議員会で法人化が決定。それを受けて4月24日、日本陸上競技連盟が文部省より財団法人として認可を受ける	2011	第19回アジア選手権を兵庫県神戸市・神戸総合運動公園ユニバー記念競技場で開催。8月1日、日本陸上競技連盟が公益財団法人に移行
1924	大日本体育協会が国際陸上競技連盟(AAAF)に加盟	1991	第3回世界選手権を東京・国立競技場で開催	2012	日本陸連事務局が、岸記念体育会館内から新宿の小田急第一生命ビルに移転
1925	3月8日に全日本陸上競技連盟創立	1995	創立70周年を迎え「日本陸上競技連盟70年史」を刊行	2014	第12回アジアクロスカントリー選手権を福岡市・海の中道海浜公園で開催
1928	8月7日に第9回IAAF総会で大日本体育協会に代わり全日本陸上競技連盟がわが国の陸上競技界統括団体として加盟承認	1998	第12回アジア選手権を福岡市・博多の森陸上競技場で開催	2015	日本陸連が90周年を迎え、「日本陸上競技連盟90年史」を刊行
1945	戦争で中断していた全日本陸上競技連盟の組織が復活。以降日本陸上競技連盟と称す	1999	第7回世界室内選手権をアジアで初めて前橋市・グリーンドーム前橋で開催	2016	第100回日本陸上競技選手権大会を開催
1950	日本陸上競技連盟のIAAFへの復帰が承認された	2005	創立80周年を迎え「日本陸上競技連盟80年史」を刊行	2018	日本グランプリシリーズが開幕。第18回アジアジュニア選手権を岐阜・長良川競技場で開催
1955	創立30周年を迎え「日本陸連30年史」を刊行。秩父宮章が制定された	2006	第34回世界クロスカントリー選手権を、アジアで初めて福岡市・海の中道海浜公園で開催	2019	世界リレー2019横浜大会を横浜国際総合競技場にて開催。日本陸連事務局が、小田急第一生命ビルからJAPAN SPORT OLYMPIC SQUAREに移転
1964	第18回東京オリンピック大会開催。日本陸連事務局が、お茶の水から渋谷の岸記念体育会館内に移転	2007	第11回世界選手権を大阪・長居陸上競技場で開催。第1回アスレティックアワードを開催	2021	新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大のため延期となった第32回東京オリンピック開催

信頼される組織で あり続けるために

公共性の高い中央競技団体として、信頼される組織であり続けるために、適切な組織運営や説明責任を行い、ガバナンス強化やインテグリティ向上を目指します。

組織力向上のために

昨今様々な情勢変化の対応と共に、皆様からの期待・要望・課題に対して、高い信頼性を維持していけるような体制を整備します。また、経営基盤の安定化やガバナンスコードの遵守、各種規程整備等、より透明性のある組織を目指します。さらに国際連盟、国内関連団体との連携を深め、積極的に関係を築いていきます。

ガバナンスコードにおける 組織の発展性

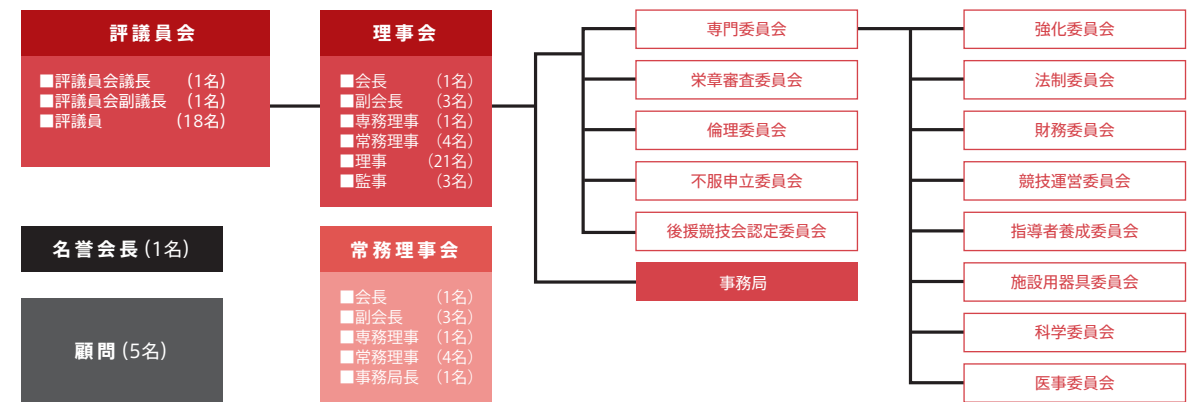
2021年12月現在、外部理事の割合は約23.3%(7人)、女性理事の割合は約16.7%(5人)となっています。2023年度以降の役員構成については、多様性(性別、専門分野、地域、年齢等)に配慮し、定款細則で理事の40%以上を女性とすることも定めています。また、役職員のコンプライアンス研修、加盟団体・協力団体との連携強化の一環としてWEB会議を利用したJAAFインフォメーションセッションの実施など、今後も一層の組織の充実と発展を目指します。

▼ スポーツ団体ガバナンスコード〈中央競技団体向け〉

	内 容
原則 1	基本計画の策定・公表
原則 2	役員等の体制整備 ※外部理事の目標割合(25%以上) ※女性理事の目標割合(40%以上)の設定とその達成のための具体的方策 ※理事の在任期間の制限(原則10年以内)
原則 3	必要な規程の整備
原則 4	コンプライアンス委員会の設置
原則 5	コンプライアンス教育の実施
原則 6	法務・会計等の体制の構築
原則 7	適切な情報開示の実施
原則 8	利益相反の適切な管理
原則 9	通報制度の構築
原則 10	懲罰制度の構築
原則 11	紛争の迅速かつ適正な解決
原則 12	危機管理・不祥事対応体制の構築
原則 13	地方組織等への指導・助言・支援

※2019年6月 スポーツ庁策定

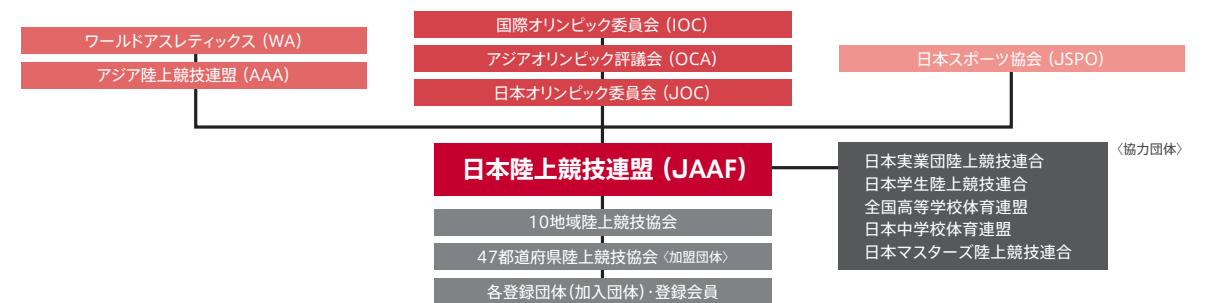
▼ 組織体制



▼ 評議員・役員・顧問

評議員	評議員会議長：中曽根 弘文 評議員会副議長：松本 正義 評議員：五十嵐 徹 渡邊 方夫 平塚 和則 北澤 晴樹 吉井 道昭 赤名 磨差己 高木 三朗 岡田 晃 上村 佳節 舟橋 昭太 安藤 宏基 伊藤 静夫 大田 弘子 繁田 進 高野 進 西川 晃一郎 坂東 真理子 増田 明美
役員	会 長：尾 縣 貢 副 会 長：黄 倉 寿 雄 瀬 古 利 彦 有 森 裕 子 専 務 理 事：風 間 明 常 務 理 事：山 本 浩 清 水 真 大 西 清 司 高 橋 尚 子 理 事：橋 本 秀 樹 山 崎 孝 一 木 内 俊 秀 吉 田 秀 志 高 木 良 郎 片 岡 雅 彦 松 澤 二 一 坂 一 郎 宮 永 正 俊 浜 崎 正 信 藤 岡 英 陽 青 木 哲 也 串 間 敦 郎 河 野 匡 朝 原 宣 治 金 川 宏 美 坂 本 修 一 田 辺 陽 子 室 城 信 之 來 田 享 子 山 崎 一 彦 監 事：遠 藤 雅 彦 小 林 久 美 細 田 正 典
名誉会長	横川 浩
顧 問	河野 洋平 帖佐 寛章 佐々木 秀幸 櫻井 孝次 田中 嵩

▼ 関連組織



▼ 歴代会長



Organisation

組織力強化

JAAF REFORM



未来に輝く人材育成と感動体験の提供を目指して

JAAF VISION 2017

2017年にJAAF VISIONを発表し、『国際競技力の向上』『ウェルネス陸上の実現』の2本柱をミッションとしています。また、ひとりでも多くの人に「陸上」と関わってほしいという思いを込めて、「陸上」を通じた感動・楽しさや、人々の生活をよりアクティブにすることを目標に掲げています。



JAAF VISION 2017 表紙

国際競技力の向上

トップアスリートが活躍し、国民に夢と希望を与える

- 2028年に **世界のトップ8**
(アジアのNO.1)
- 2040年に **世界のトップ3**

ウェルネス陸上の実現

全ての人が全てのライフステージにおいて陸上競技を楽しめる環境をつくる

- 2028年に **アスレティックスファミリー 150万人**
- 2040年に **アスレティックスファミリー 300万人**

JAAFが目指すもの

JAAF VISION 2017を達成するために、より具体的なアクションプランを作成していくプロジェクトを2018年に立ち上げ、組織運営に関する基本計画を示すことも踏まえ、中長期計画を考えてきました。東京2020オリンピックが終了し、これまでの様々な経験を糧に、新たなステージの挑戦として、『未来に輝く人材育成と感動体験の提供を目指して』を理念として掲げています。

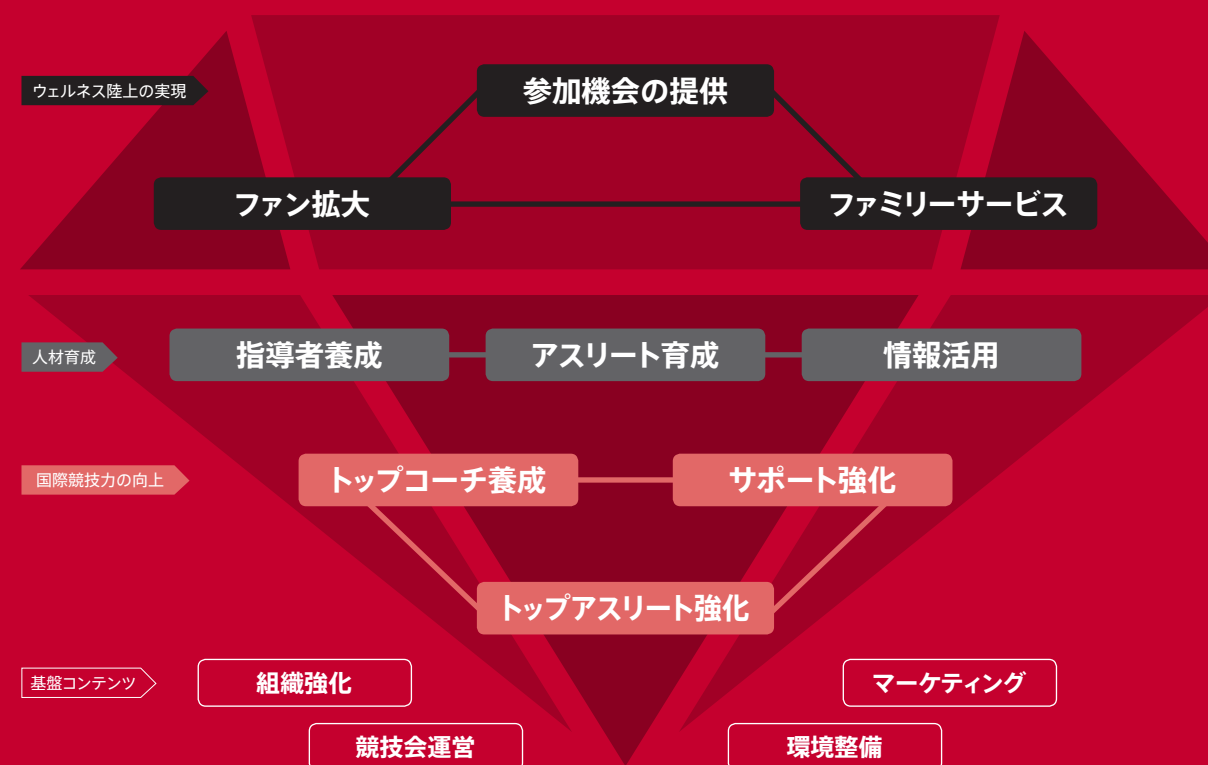
この理念について、世の中に対して、「陸上」が社会に良い影響を与え、多くの人に感動体験を提供し、競技力向上と共に、社会で貢献できる人材を輩出できるよう、「陸上」の価値向上を目指していきます。また、日常的に「陸上」に関わる中で、ちょっとした嬉しさや満足感を得られる環境づくりや、「陸上」に関わる人が、社会全体にポジティブな影響を与えられるような人材育成を目指します。

JAAF中長期計画

2021年度に発表したJAAF中長期計画の体系図について、『ウェルネス陸上の実現』、『国際競技力の向上』、さらに『人材育成フェーズ』要素を含めたコンテンツ9つと四角枠の基盤コンテンツ4つを示し、各コンテンツ・各フェーズが相互に連動し、好循環を生み出す関係性をダイヤモンドコンテンツ体系図として表現しています。

この体系図をベースに、多くの人が「陸上」を身近に感じてもらい、多様で価値のある「陸上」を通じて、豊かで充実した生活になるような環境づくりや事業を展開していきます。

▼ダイヤモンドコンテンツ体系図



JAAF Message

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が閉幕し、改めて陸上の価値、スポーツの価値を問う時機を迎えております。私ども日本陸上競技連盟は、1925年の創立以来、先人たちの礎に学び、アスリートのみならず、陸上を支えて頂いている方々、陸上を応援して頂いている方々の思いを大切に、今日ある日本陸上界を築いてまいりました。90有余年の歴史を積み重ねてこられたのは、多くの皆様のご理解、ご協力の賜物であると深く感謝申し上げますとともに、来るべき100周年に向けて、なお一層の努力を傾注してまいります。

本連盟は、2017年に「JAAF VISION 2017」を発表し、「国際競技力の向上」と「ウェルネス陸上の実現」という2つのミッションを掲げました。そして、2022年、新たなステージへの挑戦に向けて、「未来に輝く人材育成と、感動体験の提供を目指して」を理念とする「JAAF REFORM-中長期計画-」を公表致しました。

いまだ収束の兆しが見えない新型コロナウイルス感染症により社会状況は大きな影響を受けておりますが、日本陸上界の根幹を支えて頂いている加盟団体、協力団体を始めとする地域や関連団体と連携しながら、ガバナンスの確立、コンプライアンスの遵守にも注力し、運営の基盤強化、組織の多様性を重視し、失敗を恐れず改革を進めていく覚悟でおります。

公益財団法人日本陸上競技連盟
会長 尾縣 貢

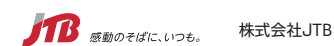
オフィシャルパートナー



オフィシャルスポンサー



オフィシャルサポーターティングカンパニー



日本陸連概要

公益財団法人 日本陸上競技連盟
Japan Association of Athletics Federations

創 立 : 1925年3月8日

法人認可 : 1971年4月24日

※2011年8月1日より公益財団法人に移行

所在地 : 〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号

JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 9階

TEL.050-1746-8410 (代表電話)

・HP <http://www.jaaf.or.jp/>

・Facebook <https://www.facebook.com/JapanAthletics>

・Instagram <https://www.instagram.com/jaaf.official/>

・Twitter <https://twitter.com/jaaf.official>

・YouTube <https://www.youtube.com/jaaf>

JAAF GUIDE BOOK

2021-2022
Challenge the Future

日本陸上競技連盟公式ガイド2021-2022

発行日 : 2022年1月20日

発行 : 公益財団法人日本陸上競技連盟

編集・写真 : フォート・キシモト

デザイン : Sync Design α

印刷 : ジョイントワークス

※本冊子掲載の情報は2022年1月20日現在のものです

本書の一部または全部を著作権に定める範囲を超え、無断で複写、複製、転載することを禁じます。

© 2022 Japan Association of Athletics Federations.
All Rights Reserved.

© PHOTO KISHIMOTO 2022